

踏絵の季節

熊谷 博子

東京新聞 夕刊コラム『放射線』（現・『紙つぶて』） 2007年3月19日

娘の公立中学の卒業式だった。その前夜、1980年代に自分で作った2本のテレビ・ドキュメンタリーを見直した。君が代斉唱の時、どういう態度をとるべきか考えたかったからだ。

番組の一つは『女にとっての戦争とは』という。戦争の中で、日常生活が徐々に侵される怖さを描きたかったので、太平洋戦争下の、女性と子どもの暮らしに焦点をあてた。戦争へと突き進むにつれ、子どもたちの教科書が変わる。“神の国”に結びつける絵や記述が増え、描かれる日の丸の旗は次第に大きくなり、数も増える。あまりにも今の姿と似ていて、がく然とした。

もう一つは『知らないという親と子へどう伝えよう戦争を』だ。中で、現代の教科書の変遷を追った。歴史の記述は、「中国へ侵略」だったのが「中国へ進出」に変わり、また海外からの抗議で「侵略」へ戻った。現代社会の検定では、8月6日に行った高校生の平和を考える芝居のカラー写真が、政治集会という理由ではずされていた。

そして卒業式を迎えた。誰もいない壇上に並ぶ日の丸と区旗に向け、全員で起立し、礼をすることから始まった。旗に向けて礼をしているとしか思えなかった。そのまま続いた君が代は、演奏する吹奏楽部の生徒たちに申し訳ないと思ったが、着席をした。

最後に、卒業生全員による、思い出と未来への希望を語る別れの言葉に、涙がこぼれた。改めて感じた。教育とは国家が統制すべきものではない。いろいろな意見を自分で考え、自由に発言できることが何より大事だと。そのためには、過去の事実と反省を次世代に正しく伝えることだ。

輝かしい出発であるはずの卒業式と入学式が、“踏絵の季節”になるのはたまらない。